

+ 20 【ひとつ】

母親が親戚のお通夜で一晩留守にするというので、隣のお姉さんがぼくの面倒を見るためにやってきました。

ぼくの面倒なんていらない。

一日や二日は水だけでも平気だし、自分の身の回りのことなんかはいつもやっているし、夜一人で寝ていてもこわくはない。

それでも母親が頼んだら快くやってきてくれて、しかもきれいなお姉さんなので、素直にありがたがったものでした。

お姉さんはおいしい晩ごはんを作ってくれて、ぼくと遅くまで歌留多(かるた)遊びをやってくれて、寝るときは横で寝てくれました。

もしお嫁さん进行うなら、こういう女性がいいとおもわれました。

そんなことをおもっていたせいか、夜寝つけない。

それで隣に寝ているお姉さんに声をかけると、返事ありません。

よほど熟睡(じゅくすい)しているのか、それともぼくの面倒を見たせいで疲れているのか。

それでも何か変な気がしたので、電球をつけてみました。

すると、お姉さんの首から上がありません。

もぐっているのかとふとんをめくってみると、寝巻きを着たお姉さんの胴体だけがありました。

でもたしかにこれはお姉さんのからだだし、首から血がでていゝわけでもないのゝ、ちっゝもこわくはありませぬ。

これは夢だとおもっていると、ようやく眠くなってきました。

朝おきてみると、お姉さんは台所で朝ごはんを作っています。

首から上もちゃんとついていました。

味噌汁のいい香りがしてきます。

「おねえさん、おはよう」

と声をかけると、笑顔で振り返って、

「金ちゃん、おはよう。よく眠っていたわね」

とお姉さんはいいました。

やっぱり夢かとおもいましたが、念のため後で懐爺のところへ行きました。

簡単に説明をすると、懐爺は難しい顔をして、

「やはりそうでしたか」

といました。

「なにがそうなんじゃ」

「あのひとはそうではないかと、前から感じていました。【ひとう】ですよ。飛ぶ頭と書きます。昼間はふつうなんですけど、夜中になると、頭がからだから離れて飛んでいきます」

「どこへとんでいくんじゃ」

「たとえば好きな男のところへですよ」

「なんじゃ。おねえさんは、すきなおとこがいるんか」

ぼくは残念そうな声をだしました。

「しかしなかなか会えないので、飛んでいくんです。それでもからだを残すのは、ここにいななければいけないと考えているからなんです。いななければいけないけれども、飛んでいきたい。だから【ひとう】になるんです」

「せつないのう。せつないおばけじゃのう」

「本人は眠っていて、まったくわかっていませんから、本人はおばけだなんておもっていませんよ」

「よけいにせつないのう」

ぼくは益々隣のお姉さんが好きになりました。

「金ちゃん、あのひとを好きになってもいいですが、あのひとに好きになられたら大変ですよ」

懐爺は益々難しい顔をしていました。

「そんなことは、てんちがひっくりかえっても、あんめえよ」

「ありますね。金ちゃんもあと三、四年経ったら、なにですから、きっとあのひとは、金ちゃんを好きになりますよ」

「なにたあなんじゃ」

「なにはなにです。わたしにはそんな予感がするのです。考えてみてください、あのひとと金ちゃんは、五つしか歳がちがわないのですよ」

「そんなじゃいまたいじしてもらおうかのう。わしはおんなぎらいじゃからのう」

「【ひとう】は退治してはいけません。なぜっておばけであっておばけで

はない。そういう難しいおぼけはそっとしておくことです」

「そうか、それはよかったのう」

けれどもちっともよくはなかった。

三年後ぼくは、この隣のお姉さんのために、生まれて始めて〈女難〉を体験することになったのですから。